

第3学年

猪苗代湖と磐梯山（浅海教官）

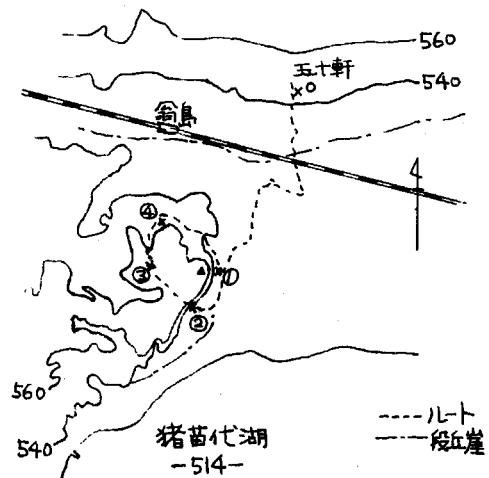
昭和42年7月18日～20日

1年の時の長瀬巡検で1日をつかってしまったため今回は2泊3日の短かい日取りになってしまった。そのうえ、最終日の20日は微音祭の為の調査に当てていただいて、役場回りや学校回りをして資料集めをしたので、実質的には、18日と19日の2日間が地形の巡検になった。18日は、私達の宿舎である東北大学理学部地理学教室の寮を拠点に、猪苗代湖北岸の、湖岸段丘、泥流地形を観察し、19日は、裏磐梯を登山しながら火山地形を観察、五色沼にまわった。

本稿においては、特に18日の観察に焦点をあわせて巡検報告にしようと思う。

猪苗代湖は東北日本の断層盆地の1つである猪苗代盆地の一部をしめ、その北岸一帯は三角形の沖積平野（湖成堆積物及び長瀬川による堆積物から成る）が広がっている。裏磐梯から猪苗代湖へ流入する長瀬川は中流以上では、現磐梯の爆発に伴う泥流を切って流れこの三角形の平坦地を東西に2分し河口近くでデルタを形成している。この沖積地の北には輝石安山岩質の磐梯山（1818m）、猪魔嶽（1404m）がそびえ、東側は川桁断層崖が続きいくつかの三角末端面を見せている。一方、西側には洪積世に形成されたとと思われる翁島泥流の丘陵地が続いている。なお磐梯山麓と沖積地の中間には、洪積世末期、或は沖積世初期の形成と思われる湖岸段丘が不明瞭ながらみられる。

以上がこの地域の地形的な概観であるが、私達は、先に、堀江正治氏の論文「猪苗代湖沿岸地域の二、三の地形学的問題」（地理評26巻12号の論文に加筆したもの）を学習しており、本巡検



1:77500

では、その論文の実証的性格が強かった。彼によれば、現在の地形形成過程は

- 1) 川桁断層崖形成による猪苗代盆地の成立。
- 2) 古磐梯（猫魔）火山噴出による「翁島押し出し」の生成
- 3) 現磐梯（猫魔）火山の噴出に伴う火山体の形成（湖面の上昇、（540m）溺谷の出現、及び古猪苗代湖層の堆積。
- 4) 湖水の溢出、日橋川の下刻による湖面の低下。
- 5) 湖岸段丘の出現と河川による開析。
- 6) 沖積面の形成。

と、推定されているが、私達は、その中の、2)の「翁島押し出し」、5)の湖岸段丘、6)の沖積面を観察・検証して、この論文を理解するにとどまった。その日のルートは、別図の如くであり、鉄道は、磐梯西線で、駅は翁島である。コンターは540mと560mであるが、560mのコンターの内側には、603.9mの三角点を最高峯として、コンターが複雑に入るのだから、見にくくなるので省略した。左側の540mの線で囲まれた部分が「翁島押し出し」の泥流である。図中○は、私達の宿舎で、○～①までは平坦な湖岸平野が、水田に利用されている。湖岸段丘は不明瞭ながら、翁島駅から五十軒あたりに平坦面がみとめられた。①では「翁島押し出し」末端の崖を見た。比高は30mほどで、風化が進み表層土壌が厚かった。②は神社の境内につづく急な石段をのぼりきったところで、この急傾斜崖は湖蝕崖であり、眼下に、湖岸平野の水田が、湖岸までつづいているのが見える。境内には、直径2～3mもある大きな鑿がゴロゴロしているが、節理の方向が、各々異っており、基盤岩石ではないことが、すぐわかる。③の東側の足下に泥流が波蝕された段丘面が見える。当時の水位は540m～535mであったと推測される。④は小さな湖沼が干上がった凹地で、たばこ、トマト、人参の畑である。ボーリングしたところ、0～25cm黒色作土、25～57cm黄褐色のclayloam、100cmでは黄色土中に軽石の風化物を含んでいた。ここは、泥流の風化物の上に火山灰が降り、凹地の為、周囲の腐植物が集り易く黒色土が深くなったらしく、かなり良い耕作地になっている。この辺には、こうした凹地が多い。そこから又、やや急な波蝕崖をおりて①にもどり、もとの道をひき返した。

後日、德音祭の発表の為に、役場の資料をもとに、土器の分布により当時の湖岸線を推定したところ、ほぼ540mのコンターに一致したことを付記しておきたい。

（4年 野崎記）